

第4回 岩倉具視と京都再生

文：幕末維新ミュージアム霊山歴史館 副館長 木村幸比古



岩倉具視は京都生まれの下級公家でした。岩倉は三条実美と、薩摩と長州を陰で結びつけ討幕運動から王政復古を実現させた立役者でした。

維新を迎えた京都市民は「御一新」とよび、新政府への期待をつのらせました。そこに突如、大坂遷都論が浮上し、さらに東京遷都になりました。京都市民の落胆ぶりは計り知れないものがあり、岩倉は遷都で都市が衰退するのではと危機感をつのらせました。

明治政府は不平等条約改正問題で明治4年から6年にかけて岩倉使節団を派遣しました。岩倉は特命全権大使となり、副使に大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳が就任しました。岩倉は衣冠、袴姿、副使は洋服にシルクハットで、近代化を模索する和洋折衷で各国と条約改正に臨みましたが、進展せず、訪れた国の産業の視察団になりました。まわりから物見遊山かと疑問視されたとき、岩倉は報告の書籍の扉に「観光※」と揮毫しました。今の観光の原点になりました。

岩倉は京都再生構想を明治16年1月「京都皇宮保存に関する意見書」（重要文化財）にまとめ、5月には岩倉自ら京都を視察調査しましたが、その途中で体調をくずし7月20日に亡くなりました。岩倉は太政官に14カ条からなる建議を行ない、明治天皇の東京遷都で荒廃した京都を、文化観光都市としてよみがえらせようとしていました。

岩倉の京都再生計画は、没後に実現しました。「桓武帝神霊奉祀の事」では、平安神宮が造営されました。「宮闕の近傍に洋風の一館を築造する事」は、御所の隣接地に洋風迎賓館を建て外国の賓客をもてなすことでしたが、平成17年に和風の京都迎賓館が建ちました。

「二条城を宮内省の所管と為す事」は、明治17年宮内省の所管となり、昭和14年京都市に下賜され、今も外国人観光客が観光に訪れ、御所の付属建物のように楽しんでいます。「宮殿ならび御苑に関する事」は、御所と御苑は管理され日時を定め一般公開されています。天皇には毎年避暑に京都を訪れていただき、外国人にも古都の伝統美を満喫してもらいたいと岩倉は意見書にまとめています。

そのほかにも岩倉は嵐山の景観保全のため桜、楓の植樹を提唱し、現在も風光明媚な景色で親しまれています。

※「観光」

⇒ 他国の本質的な物事、優れた光、天下の風光をくまなく観る、理解するという意